第3281図

きく科

おおあれちのぎく

Erigeron sumatrensis *Retz.*

(=E. musashiensis *Makino*)

南部アジア原産の2年生雑草、30数年前に日本に帰化したらしく、先に渡来したアレチノギクを駆逐しつつ殆んど全国に拡がつてしまつた。冬期には灰緑で白い絨毛を密生した倒披針形の葉を多数に座生する。茎は高さ1m内外、直上し、多数の葉をつけ、夏に入つて上半部に密に側枝を分ち、円錐様に小頭花を無数につける。茎葉共に絨毛あり、葉は長さ8cm内外、長い倒披針形で基脚は葉柄様となり、稍々厚手である。頭花は俵状で長さ5mmヒメムカシヨモギのそれに似て大きく、且つ蒼緑なので区別できる。舌状花は汚白色、極めて細く長さ4mm、総苞の外に殆んど出ない。冠毛は淡褐色。果は落下して容易に発芽する。アレチノギクとヒメムカシヨモギとの種間雑種という説は誤りと思われる。

第3282図

きく科

おおゆうがぎく

一名ちょうせんよめな

Aster incisus *Fisch.*

(=Kalimeris incisa *DC.*)

本州播摩以西、九州を経て朝鮮、満洲、シベリアに分布し、稍々水湿のある路傍山足等に生ず。高さ1-1.5m、地下茎に白い細紐状の根茎があり、葉はユウガギクの淡緑且つ甚だ薄いのに較べて厚味があり、欠刻なく、又ヨメナの暗蒼緑で三行脈の著るしいのに比較して、三行脈は不明、上面は光沢に富み長楕円状披針形で長さ10cm未満、稍々欠刻状に疎鋸歯がある。秋に長い分枝の先端に碧紫色の頭花を開き径3cm内外、総苞は半楕円体で、片は3列、尖は鈍頭で紫色の着色がある。冠毛は極めて短かい。近時細胞学的にヨメナ（染色体数2n=63）は本種（2n=72）とインドヨメナ（A. indicus *L.* 2n=54）との雑種起原に考えられるという。

第3283図

きく科

ほしざきゆうがぎく

Aster Iinumae *Kitam.*

f. discoidea *Makino*

稀に見出されるユウガギクの舌状花を喪失した品種で、頭花はその為に黄色の半球状に盛上つてみえる。因にユウガギクの学名はAster pinnatifidus(*Maxim.*) *Mak.* を用いていたが、その発表（1913年）よりも古くに同じ型式の名を全く別の植物に *Kuntze*（1891年）、またそれとも別個に *Sessé*（1894年）の両氏が与えている。従つて同一名は後の方が改名を必要とするので上記Aster Iinumae *Kitamura*(1938年)を使用することにした。

こんぎく

Aster trinervius *Roxb.*

var. congestus *Fr. et Sav.*

f. hortensis *Makino*

花を観賞用に栽培する多年生草本。ノコンギクの品種で舌状花冠が濃紫色の美しい極端型を発見して古くに栽培にうつし、これを根分けで植えついで今日に到つたもの、野生品との間に一応の不連続はある。高さ50cm内外、地下の白色の根茎でひろがるが余り遠くへ走らず稍密生した群叢となる。葉はノコンギクよりも淡緑色、鋭頭、質が薄い傾向がある。また逆にノコンギク様の葉であるが小形、質厚味を持ち、全体に丈低く枝が密生する型となり、花色は淡紫のままのものをコマチギク（f.humilis *Mak.*）という。共に多型のノコンギクの天然品種中から選択されたもの。

第3284図

きく科

みやまこんぎく

一名はこねぎく

Aster viscidulus *Makino*

日光・箱根等を中心に山地向陽の斜面に生ずる多年生草本。ノコンギクに似て茎は剛直、直立性で、叢生株立となり匍枝を出さない。葉は卵状長楕円形が基準で相当に変化するが、長さ5cm内外、質稍〻乾いて硬く、不整の低い歯牙様鋸歯があり、短毛を密生し、粗のビロード感あり。盛夏を過ぎて茎頂は疎に繖房状に分枝し、各頂に頭花をつける。頭花は径2cm強、淡紫乃至汚白色、総苞は卵状鐘形、総苞片は縁が乾膜質となり且つ先端に粘液を分泌するのが特徴。冠毛は顕著で白い。

第3285図

きく科

きしゅうぎく

一名ほそばのぎく

Aster sohayakiensis *Koidz.*

(=A. Ohtanus *Makino*)

紀州の溪谷岩壁に生ずる多年生草本で、高さ50cm内外、地下茎は岩の隙間を匍い、茎は直立するも上部屢〻彎曲し、瘠せて、葉数も少ない。葉は茎の中部以上のものだけが花時に残り、狭長の披針形、長さ10cm内外、両端に長く漸尖し、屢〻多少鎌形となる。質稍厚膜質で淡緑色、サワシロギクに似るが脆くない。縁には甚だ低いが明瞭の歯牙様鋸歯がある。表面では主要脈が陥入している。秋に入ると茎頂に疎に分枝し、白い頭花を開く。総苞は鐘形で長さ5mm、舌状花は5-8、さびしい花である。学名の種小名は襲速紀地方に産するの意で、これは九州より四国、紀伊半島に到る一つの自然地理区劃をさし、熊襲のソ、速吸瀬戸（今の豊予海峡）の（ハヤ）、及び紀伊のキを綴って表示したものである。しかし本種は今の所、四国及九州には未発見。

第3286図

きく科